

国内繊維用紙管では、シェア50%超次にめざすのは“グリーン”&“クリーン”

田中紙管株式会社

大阪 21

ISO 14001

<http://www.tanakapt.co.jp/>



紙管製品ラインアップ

創業明治44年 紙管を製造して約百年

紙管と言えば、アルミ箔やインクロール等でおなじみだが、そういった小径ものばかりでなく、今や産業界では欠かせない存在となっている。田中紙管はこの紙管を製造して約百年の歴史を持つ老舗企業である。

田中紙管がある八尾は、古くから河内木綿の産地として栄えた。明治44年、機械紡績の発展に伴い進出してきたイギリス系紡績会社の依頼で、紙管を製作し始めたことが同社の始まりであり、それは同時に国産紙管の歴史の始まりでもあった。以来、業界をリードし続け、今日も繊維用紙管ではシェア50%を誇る。ここで言う繊維とは紡績に限らない。自動車のエアバッグやシート、タイヤに利用されるナイロンやポリエステル繊維、航空機の炭素繊維。あるいは、高強度・耐熱性で注目のスーパー繊維と多岐に渡る。アルミやプラスチックに比べ、紙管はコスト面に優れている。だが同社

の紙管が支持される第一の理由は、時代時代の産業資材の変遷、ニーズの変遷に見事に応えてきた点にある。例えば丈夫な炭素繊維も実は横方向の摩擦に弱い。そこで、繊維切れを起さないために管の中かから糸を抜く技術が生まれた。表面の平滑さが要求される用途にはミクロン単位で応えている。強度・耐久性は今や金属並みだ。繊維用以外の製品バリエーションも幅が広く、光学・食品・医薬分野で使われるフィルム用紙管、リール型紙管（エコーリール）、トレーサビリティ機能を付加したICタグ付紙管等がある。

水に溶けるグリーン紙管 紙粉が出ないクリーン紙管

同社は現在、環境対応製品グリーン紙管の普及に力を注いでいる。紙管は使い終わると産業廃棄物として処理されることが多い。水に溶けにくいため再資源化が困難だった。この点を解決したのがグリーン紙管だ。環境対応製品は「環境にいいが値

段が高い」場合が往々にしてあるが、同社は「価格上昇も性能低下もない」ことを目指した。結果、グリーン紙管を用いれば、逆に産廃処理費が不要となるメリットも生まれた。

グリーン紙管は、特殊加工で紙粉を発生させない紙管。液晶テレビや携帯電話に使われるフィルムの巻き取り等で、プラスチックに代わる管として注目されており、クリーンルームでも活躍中だ。

同社では、製品開発に伴い加工機械も自社で開発しているのも特長だ。これらは海外に輸出され、田中式紙管製造機として定評がある。「他の紙管では糸が切れやすく長持ちしないが、田中式は優秀」と高い信頼を獲得。世界が認める精度と品質の高さである。



グリーン紙管



グリーン紙管(左上)と通常紙管(右下)を水に浸漬して30分後、通常紙管に変化はないがグリーン紙管は溶け始めている

Company Profile

田中紙管株式会社

住所 / 〒581-0092
八尾市老原6-88
創業 / 明治44年
設立 / 昭和15年10月
資本金 / 7,000万円
従業員 / 125名
TEL / 072-992-5111
FAX / 072-992-5180

■主な事業内容

紙管および紙管製造設備の設計開発、製造および販売

■主な取引先

合成繊維メーカー、プラスチック・フィルムメーカー、印刷会社、アルミ箔メーカー、製紙メーカー、総合商社等



当社のセールスポイント

大阪に生まれ、育てられた企業。
これからも、
紙管で社会貢献を目指します。



代表取締役社長
田中 則男さん

田中家のルーツはもともと北堀江にあります。大阪商人の血が流れていることを考えると、大阪に育てられたという思いがあり、今後ともこの地で新たな製品を発信してまいります。特に、各業界の先端を行かれる企業のニーズに確実に応えることで、紙管の可能性を広げていきたいと考えています。また、環境対応製品の普及に努め、社会に貢献できる企業を目指します。